

神奈川山梨教会連合会たより

かりん

「吉備舞を通して信心を伝える」

宮川晴江先生は、昭和57年9月、愛媛県の川上教会でお生まれになりました。

平成21年4月に学院を卒業され、東京都文京区にある金光国際センターで研修生、職員として2年半御用されました。

平成24年に小田原教会の宮川昌也先生とご結婚され、2人のお子さんの母として、吉備舞の指導者として御用に励まれています。

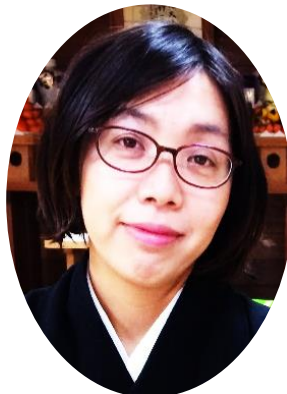
○国際センターに入られたきっかけは何か。

晴江先生(以下:晴)…小学校6年生のとき、川上教会に実習に来られた学院生がアメリカの方でした。その後も交流が続き、ホームステイさせていただいたこともあったりして、現在も親しくさせていただいています。

学院在学中に国際センターのインターシップの募集を見たとき、その経験を思い出し、海外信徒や教会のない国に住む信奉者が繋がり合う架け橋のお手伝いができ

ればと応募したのがきっかけです。
○吉備舞を始めたのはいつ頃ですか。
晴…3歳から母の指導で始めました。
○以前、連合会行事で舞われましたが、思い出に残っていることはありますか。
晴…吉備舞は、祭典儀式として神前や霊前に向かって舞う「奉納舞(ほうのうまい)」と、鑑賞のために記念祭やコンサートなど観客に向かって舞う「演奏舞(えんそうま

川でスベって山でコロんで…とってきました Interview 第51回 小田原教会 宮川晴江先生



い)の二つに分けられます。

連合会で舞わせていただいた「箴の梅(えびらのうめ)」は演奏舞で、その中

でも秘曲と言われています。舞人が舞いたいと思っても、機会に恵まれなければ舞えません。ですから、この話をいただいたときには興奮と緊張で身体が震えました。力不足ではという思いと是非やりたいという思いが混じり合っていました。10ヶ月間毎

日練習し、当時はやりきったと思いましたが、今はもつとこう舞えば良かったと反省があります。
○今、指導者として子ども達に伝えたいことは何ですか。

晴…私は、「吉備舞を通して信仰心を学ぶ」「吉備舞を通して達成感を感じる」「御用を通しておかげを実感する」という、三つのことを得ることができると考えています。それらを糧に子ども達には、吉備舞の御用を通して神様御霊様との絆を築いて欲しいと願っています。

他にも、稽古の前後にはご祈念とお届けをします。初めは私がして見せますが、段々自分でお届けができるようになります。これは、先々で何かあったとき、このお取次の練習が生きて欲しい、どう願ったらよいか分からないということがないようにして、神様が悩みや願いを受け止めてくださると実感して欲しいと願っているからです。

そんな子ども達の姿を後ろで見ている親も一緒に、こうやってお願いすればいいんだと知って欲しいし、子ども達の成長を見て、子どもながらに御用に立ってくれていることを分かって、初めは習い事気分だった親の皆さんにも信仰心が身に付き、金光教を少しでも理解してもらえるようにと努力しています。

○ありがとうございました。(村田光治)

立教一六〇年 教師信徒研修会報告

7月13日(土)午後1時から、かながわ県民センターを会場に、立教160年教師信徒研修会を開催しました。今年立教160年のお手柄ということ、当連合会からの願い、出に心、ご本部から、教学研究第2部長の高橋昌之師が講師として来ていただきました。(15教会から参加者51名)

開会(祈念後、山田信二会長が次のように挨拶されました。

「立教160年にあたり、この節年をどのように意義あるものにしていくかということに、それぞれに心を砕いておられることと思います。当連合会では、改めて立教という出来事について学び、立教という切り口から教祖様のご信心を頂き直すことを願って、この研修会を開催することといたしました。講師の講話を拝聴し、ご参加のみなさんお一人お一人が、現代社会をどう生きるか、現代を生きる人たちにどう信心を伝えていくかを求めて頂ければ有難いことでもあります。」

続いて高橋昌之師より「それぞれの立教」という講題で講話がありました。

- 講師は、当連合会から要望した四つのテーマ、
- ① 「立教」とはどのようなことなのか。
 - ② どうして立教は安政6年10月21日と決

められたのか。

③ 立教神伝の意味合いとそれを受け止めた教祖様のお気持ち・信心・精神とは。

④ 立教神伝を、今日私たちがどのように受け取り、どのように信心を展開するべきか。

に應える形で、近年教団に提供された教祖執筆の新資料を紹介しながらレジュメに沿ってお話を進められました。(以下要旨)

◎「立教」が安政6年10月21日と決められたのは明治43年になってからである。それまでは安政2年が立教の年とされていたが、教祖のご手記が教団に提出され、「金子大明神、この弊切り境に肥灰差し止めるから、その分に承知してくれ・・・」という記述がある安政6年10月21日が立教の日とされることになった。

◎立教神伝において、教祖様は「金子大明神」(当時の御神号)と呼びかけられ、取次を頼まれた。神様は、金子大明神としての教祖様に、人を助ける働きを現すように頼まれたのである。教祖様は、(赤沢文治という個人とは)「別の生」を生きるように神から願われ、自らの願いとされたのではないだろうか。これは、教祖様だけでなく、現代を生きる私たちへの呼びかけでもある。

◎立教神伝を受けた教祖様は、神前奉仕以外のことから手を引いた。つまり、妻とせにとつて、立教は一家の主、夫としての金光大神の「死」を意味していた。そして、試行錯誤の末、とせは家庭の仕事のみならず参拝者の話を聞くなど

○かりんの輪

「私と金光教」

横浜西教会 松尾元敬

私の信心は、昭和三十四年上京して入社後、不眠症にかかり、その治療のため九州の両親の元に帰省してから始まりました。病院に通ってもすぐ治るものでなく、丁度姉が学院を卒業して修行生として生活していた久原教会(福岡県)にお世話になることになりました。

教会は、姉が心から師として仰いでいる阿部俊雄師が教会長、他に奥様先生、後継者の道生先生等、常時十名前後の人達が生活されていました。又、少年少女会も盛んで、ご祈念の時間は多勢の参拝者がありました。私はその中で生活させて頂くようになりました。

教会内はご祈念、お取次、月例祭などの行事がありますが、私はそれらに関係なく自分勝手な生活をしており、信徒役員の方から、少年少女会の子供達に悪影響を与えるから実家に帰して欲しいと親先生(教会長)に言われたそうです。

しかし親先生は私を帰さずに取り組んで下さいました。また、私がなかなか素直な生活に戻らぬので、姉は親先生に「もう私も疲れしました・・・もういいです」と言う

の御用をされていたと伝えられるように、「一子大神」として神の世界と人間の世界の間で御用に当たられるようになった。

◎長子浅吉は、立教神伝を受けた教祖様の代わりに戸主とすることが願われた。また15歳であり、その若さで戸主になることは珍しいことであつた。教祖様を金づるとみた博徒達に誘われ博打に手を染めることにもなつた。家庭の変化に翻弄された面がある。一方で浅吉との関わりで信心するようになる人達もあつた。浅吉も「金光正神」としての生を生き、人助けの道を歩むことが願われたのである。

◎「その時死んだと思うて」という立教神伝の言葉はどう受け止めてゆくか。内田守昌師は、湯川誠一師の「死んだと思えなんだから、思わんでよろしいがな。思わんならんようになったら、思うたらよろしいがな」という言葉を聞き、「その時」が来た時、自分はどうかであるか、それこそが問題ではないか、と思つた。そして後年、内田は病気で入院し、薬が効かず不安と不満が募る中、死ぬ思いをした。そこに親教会長夫人が見舞いに来られ、「お願いしておりますから」と一言。この言葉を聞き「そうか、願われているんだ、何を自分がジタバタすることがいるか」「今日がおかげ日じゃ」と感激した。翌日、数値が下がり快方に向かつた。

◎またある女性信徒は、長年、障害者教育に教師として当たっていたが、社会に出た教え子が「先生助けて。誰も相手にしてくれない。自殺したい」といつて訴えてくることから、退職して自費で障害者に働く場を提供する小規模作業所を開設

した。この女性にとつて、安定した教員生活から不安定な施設開設に踏み出したことは、死んだと思つて欲を放すことであつた。

◎私たちにとつての立教とは何か。それはまず、こちらが願う前に神に願われていることへの気づきである。悠久の時間が流れる中で、私たち個人に願いがかけられている。しかし、個人の努力だけに任されているわけではない。教祖や教祖の家族が神号を与えられていたように、個人を越えた生を生きることによつて、個人の力ではできないことが可能になる。「立教」とは、それを信じて、神の願いに身を委ねていくことである。

講話の後、活発な質疑応答が行われました。その後閉会式にあたり、大塚東子副会長(信徒部長)は、「家族には信心すればおかげが頂けるのよ、と言えは通じるところがありますが、他人に信心を伝える時には、今日のような教義的なお話を聞いておくことが力になると思ひます。ぜひ今日聞かせて頂いたお話を、それぞれの教会でご報告なさってください。そして、次回、このような機会がある時はそれぞれお一人連れてきてください。そのような取り組みが、金光教を元気にしていくこととなります。よろしくお願ひいたします」と

挨拶。記念撮影をして解散しました。

講師の
高橋先生↓



と、「あんた何をいうか、他人の私がサジを投げんのに、肉親のあんたがあきらめるとは？」と叱られたそうです。そして、私がお取次の席で「信心もできないし、教会を出て行きます」と最後通告みたいな言い方をしたとき、親先生から懇々と諭されました。それから私も心を改め、掃除、洗濯、布団の干場作り、走り使い、マキ割りなどの御用をさせていただきました。食事は進み、夜も寝られるようになり、お参りした母が「元気になった」と大変喜んでいました。約一か月程して、「少し不安は残るけれどよかろう」と親先生は池袋教会(東京)を紹介され、日本鋼管に復職できました。

親先生には、私が久原教会に寝泊まりさせて頂いている間は勿論、職場に戻つてからも、大変ご苦労をかけ、どれだけご祈念されていたかと思うと有難くてたまりませ

ん。その後、父の恩師の方の紹介で妻と結婚することができました。そうしておかげを頂き、家族は二男二女を得て、子供達も結婚し、孫まで含めると、今は総勢十九名になりました。

追記・私の姉松尾むつ子は昭和五十五年十一月より朝日ヶ丘(大分県)で布教を始め、問題ある子等とその立ち行きに取組み、平成三十年二月に亡くなりました。

輔教懇談会 報告

9月7日(土) 13時から15時半まで、かながわ県民センターで、上北沢教会長夫人・水津智子(すいづともこ)さんを講師に、輔教懇談会が開かれた。講題は「信心を伝える」。教会内で取り組んでいる活動について、その一端をお話し下さった。

写教の会は、金光教の御教えを書く会。金光教にはよい教えがあるが、それをたくさん知って、生活に活かして頂きたいとの願いを持ち、信者さんに話してみた。賛同してくれた方が数人。最初はパソコンでお手本を作っていたが、願っていたら2年後、書道の先生が来て下さって軌道に乗り、8年過ぎたという。

緘黙(かんもく)の歌声ライブ。緘黙というのは家族友人の前なら話せるが、知らない人の前では声が出なくなるという症状。元・緘黙のシンガーソングライターが居ることを知り、ライブを聴いた。教会で紹介すると、皆さん聴いてみたいと言う。教会でライブなどやってみてもらえるのかどうか、無理と思いつつ、「緘黙について多くの人に知ってもらいたい、そこから歌手になった人を広く世間に紹介したい」とお願いしたら、思いがけなく教会でライブが出来た。英語教室は教会としての活動ではなく、水津さん個人の活動だが、苦手意識のある

子ども達に英語を教えたいと願っていた。友人に話したら「私の子どもに教えてくれない?」。それをきっかけに、学習障害、知的障害、潔癖症、注意欠陥多動性障害、不登校など、さまざまな子ども達と関わることになった。大勢を一度に教える学校では到底無理な「一人ひとりに向き合う接し方、教え方」が出来るので、それが功を奏して、目に見える成果が出て来た。5年目を迎えた。

活動をする上で大事な事は、教会の行事である事を忘れない事。レジャーやお稽古事は教会外でも出来る、教会でやることの意味づけをしつかり持ち、信心の稽古につなげたい。例えば写教なら字が上手になるのが目的ではなく、御教えを学ぶ事が目的だということ。

最後に山田連合会長が「内容の濃いお話を聴けてよかった。皆さんも、教会が違うから、英語が出来ないから無理だと決めないで、水津さんがなさったように、願いを立て、行動し、展開してゆく在り方を学んでほしい。自分なら何が出来るかを考え、行動してほしい」と挨拶されて、実り多い懇談会を終了した。参加者は12名。

講師の行動力も素晴らしいが、失敗や撤退を恐れず、願いを立てて行動することの大切さを学んだ。あきらめずに挑戦したいと思うし、挑戦する人を応援したいものだと思う。(大塚東子)

「連合会ホームページが出来るまで」

平塚教会上杉秀一

奥川先生のご依頼で、「ホームページ作成の御用」に携り13年になります。この機会にホームページ作りの概要をご紹介します。

まず、担当された方にメールで掲載原稿と写真や資料を送って頂きます。お預かりしたデータは、ホームページとして認識される形式に書き換えます。注意力や集中力が要る作業で脳トレ問題を解く感じですが。動作確認と修正が終わったらサーバに転送します。そして関係者に終了報告と最終確認をお願いします。不具合があれば修正を行い「一本の記事」が完成します。

直近3年間で掲載した記事は40本を超えました。年4回発行される「かりん」も、第17号以降はすべてご覧頂けます。

まだスマホには対応しておらず、画面が縮小表示されます。近年、スマホでご覧になる方が増加中との調査結果もあり、そろそろ具体的な対策を考える時期が来たようです。

金光教神奈川山梨教会連合会

発行者 山田 信 二

〒245-0017 横浜市泉区下飯田町926-23
金光教横浜西教会内